譲歩からの変化[1]

話し言葉における発話頭 *although* の分析

水野 優子

1. はじめに

英語の譲歩を表す接続表現には、although、in spite of、nevertheless など様々なものがある。これらがどのような表現から発達したかについては、先行研究でしばしば指摘されている（König 1994: 679）。一方、譲歩からの意味変化については従来あまり注目されてこなかったが、近年、譲歩の意味を持つ表現が新たな用法を発達させている事例についても報告が見られるようになってきた。特に大橋（2019）は、譲歩を含めた対立・対比を表す表現において、トピックシフトマーカーという談話標識的機能への拡張が共通に見られるようだ、という仮説を立てている。しかし、譲歩を表す although にもこの仮説が当てはまるかは、まだ検証されていない。

本研究は、英語の話し言葉において although にもトピックシフト（話題転換）を合図する談話標識的機能があることを実証的に示し、それ以外の用法との関連性を明らかにすることを目的とする。さらに、although の意味変化について、使用基盤モデルとの関係から考察を行う。

2. 方法

使用コーパスは、*The Corpus of Contemporary American English* (COCA)の話し言葉セクションを用いた。そのうち、2019 年に収録された資料には 280 件の although が生起しており、その統語的振る舞いを観察すると、表 1 のように分類することができた。

表 1　COCA 話し言葉セクション(2019)の although

統語的特徴		生起数	
従属節を導く	前置	67	198 (70.7%)
	後置	124	
	中位	7	
独立節を導く	ターン（話順）冒頭	19	59 (21.1%)
	非ターン冒頭	40	
非定型節あるいは動詞を持たない節を導く		10 (3.6%)	
不明		13 (4.6%)	
合計		280 (100%)	

この調査から、2019 年のデータのみでは、談話標識的に用いられていると考えられるターン（話順）冒頭の独立 although 節が 19 件と少ないことが分かったため、調査範囲を 1990 年から 2019 年の話し言葉セクション全体に広げ、ターンの冒頭に現れ、独立節を導く although を合計 481 件収集し、分析の対象として追加した。

although の談話機能の分析には、Schiffrin（1987: 24-29）の談話モデルを用いた。Schiffrin（ibid.）は、談話は異なる要素から成る互いに関連し合う５つの側面、すなわち（i）概念的構造、（ii）行為構造、（iii）やりとり構造、（iv）参加者構造、（v）情報構造から構成されていると説明している。

3. 分析と考察：話し言葉における although の談話機能

収集した用例を観察すると、まず、従属節を導く although に標準譲歩の用法があることに加えて、ターン冒頭で独立節を導く although に話題転換の用法があることが分かった。それぞれ(1)と(2)に例示する。

(1) SHAFAK) : (…) But if I may add this, **although** this is a book that deals with heavy subjects, I honestly think it is an uplifting story because it's also a story about friendships. (COCA)

(2)［状況説明］ニュース番組の冒頭。キャスターの Maggie が天気予報士の Dave について言及している。

MAGGIE: I think, Chris, we learned an important lesson this morning. (...) We have to really stop tuning out Dave.
CHRIS: Yeah. Its a good point.
MAGGIE: And listen a little more.
CHRIS: **Although** from what I have been told in the last few moments, there is now a grassroots movement to bring back Annie and Beetle Mania to Broadway. (COCA)

(1)では、although 節の「この本は重いテーマを扱っている」という内容からは「その本は元気が出る話ではない」という推論が導かれるが、主節はそれと対立することを述べている。(2)では、Dave との付き合い方か

ら、ミュージカルの復活運動へと話題の転換が起きており、although は「さて」や「ところで」にあたる話題転換を合図する談話標識的な役割を果たしている。話題転換の although には、(3)の単独用法も観察された。

(3) OSGOOD: **Although**, you know something? (COCA)

次に、although の話題転換の用法とその他の用法、すなわち標準譲歩、訂正譲歩、不賛成（Mizuno（2022）を参照）との関連性を、情報構造とやりとり構造における特徴に注目して分析した。情報構造については、although 節が「前景情報」と「後景情報」のどちらを表すかという観点から分析を行った。やりとり構造については、Couper-Kuhlen and Thompson（2000）が提示した「基本譲歩」（Cardinal Concessive）パターンを用いた。このパターンは(4)のように表される。

(4) A: X (States something or makes some point)
B: X' (Acknowledges the validity of this statement or point (conceding move))
Y (Goes on to claim the validity of a potentially contrasting statement or point) （ibid. 382, 385）

(4)は、会話において、譲歩は基本的に２人の話者（A と B）を要し、X、X'、Y の３つの部分から構成される連鎖の中で行われることを示している。本研究では、although の使用がこのパターン（の一部）に一致するか、一致するとすれば、although は X'と Y のどちらで使われているかを分析した。

以上の調査の結果、訂正譲歩と不賛成、及び不賛成と話題転換の間の中間的な用例が観察され、標準譲歩を表す従属接続詞としての although から話題転換を表す談話標識としての although に至るまで、連続体を成していることが分かった。本研究の分析結果は、表２にまとめられる。

表２　COCA の話し言葉セクションに見られる although の用法

<table>
<tr><td>用法</td><td>①</td><td>②</td><td>③</td><td>④</td><td>⑤</td><td>⑥</td><td>⑦</td><td>⑧</td><td>⑨</td><td>⑩</td><td>⑪</td></tr>
<tr><td>談話機能</td><td colspan="2">標準譲歩</td><td>訂正譲歩</td><td colspan="2">（訂正譲歩）</td><td>（訂正譲歩・不賛成）</td><td>（不賛成）</td><td>不賛成</td><td>（話題転換）</td><td colspan="2">話題転換</td></tr>
<tr><td rowspan="2">統語的特徴</td><td colspan="4">従属節を導く</td><td colspan="6">独立節を導く</td><td>単独用法</td></tr>
<tr><td>前置</td><td colspan="3">後置</td><td>非ターン冒頭</td><td colspan="6">ターン冒頭</td></tr>
<tr><td rowspan="4">情報・やりとり構造における特徴</td><td colspan="3">後景</td><td colspan="3">前景</td><td colspan="6"></td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td colspan="3">会話における基本的な譲歩のパターンに（一部）一致</td><td colspan="5"></td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td>A: X
B: X'
although Y</td><td>A: X
B: X'
Although Y</td><td colspan="5">A: X
B: Although Y</td></tr>
<tr><td colspan="6"></td><td colspan="5">聞き手による発話とは反対方向へ行く</td></tr>
</table>

最後に、although の意味変化について考察する。後置節の頻度が前置節の約２倍であることから、although は後置節の中で繰り返し使用される中で、相手の発言内容とは対立する主張を行うという対人関係的機能を果たすようになり、それに伴って統語的にも、標準的な従属節としての用法から逸脱し、発話頭で談話標識として使用されるようになったと推測できる。この although の用法の変化は、「言語知識は言語使用の中で揺らぎ定着する動的なものである」（大谷・中山 2020: 16）という使用基盤モデルの考えを支持する例であるといえる。

4. 結論

本研究は、コーパスから収集した用例を分析し、although にも話題転換を合図する談話標識的機能があること、及び although の用法が標準譲歩から話題転換に至るまで連続体を成していることを実証的に示した。

参考文献

Couper-Kuhlen, Elizabeth and Sandra A. Thompson (2000) “Concessive Patterns in Conversation.” Couper-Kuhlen, Elizabeth and Bernd Kortmann (eds.), *Cause Condition Concession Contrast: Cognitive and Discourse Perspectives*, 381-410. Berlin and New York: Mouton De Gruyter.

König, Ekkehard (1994) “Concessive Clauses.” Asher, R. E. (ed.), *The Encyclopedia of Language and Linguistics*, 679-681. Oxford: Oxford Pergamon Press.

Mizuno, Yuko (2022) “A Corpus-Based Analysis of Independent *Although* and *Though* Clauses: Their Commonalities and Differences.” *JELS* 39, 143-149.

大橋浩 (2019) 「譲歩からトピックシフトへ—使用基盤による分析—」森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）『認知言語学を拓く』261-283. 東京：くろしお出版.

大谷直輝・中山俊秀 (2020) 「用法基盤モデルの言語観」中山俊秀・大谷直輝（編）『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点—用法基盤モデルに基づく新展開』3-25. 東京：ひつじ書房.

Schiffrin, Deborah (1987) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

[1] 本研究は JSPS 科研費 JP22K00614 の助成を受けたものです。